

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本博士論文の目的は、指導者の期待と選手の自己概念を考慮したうえで、中学生年代のサッカー指導者の選手に対する「言葉がけ」が選手のサッカー有能感に及ぼす影響について明らかにすることにある。

体育の学習指導やスポーツの指導場面では、指導者の選手に対する期待が指導行動に与える指導者側の要因の一つとしてあげられる。また、その期待は、選手のパフォーマンスには直接関係のない場面での選手への発話にも影響を及ぼすことが明らかにされている。そこで本博士論文では、選手のパフォーマンスに関わるもののみならず、プレーとは関係のない場面での指導者の選手に対する発話行為を「言葉がけ」として定義づけ、スポーツ指導者の「言葉がけ」に影響を及ぼす要因として選手に対する期待に着目した。同時に、「言葉がけ」の認知に関わる選手側の要因として、自分自身がどのような人間であるかといった自分自身についての認識である自己概念と、その中核をなす自尊感情の変容に関連する主要因と捉えられる、全般的な身体的能力の自信の程度を示す身体的有能感に着目した。そして、10代で実施されたスポーツの第1位としてあげられるサッカーに種目を限定し、中学生を対象として指導者の「言葉がけ」が与えるサッカー実施時の認知に焦点化したサッカー有能感への影響を明らかにすることによって、指導者と選手の相互作用の場として捉えられる学習・指導場面において、その相互作用が有効に機能し、適切な学習・指導効果がもたらされるための一つの知見を探ろうとしたのが本論文である。

これまで経験的に扱われることの多かった、特にパフォーマンスに限らない指導者の「言葉がけ」行為に着目し、その影響を期待と有能感の関係から理解しようとする研究は、先行する研究をみても独創的な研究であるといえ、また、今後のスポーツ指導においても有用な知見となることが予想される意義のある研究であると考えられる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では、期待、言葉がけ、自己概念、身体的有能感に関わる研究を総括し、本論文の問いとそれを明らかにするための方法について最初に明確に示し(第1章)、まず中学生年代のサッカー指導者の選手に対する期待を定量化し得る尺度を開発し(第2章【研究1】)、実際の指導現場において中学生年代のサッカー指導者が期待値の異なる選手に対してどのような「言葉がけ」を行っているのかについて検討している(第2章【研究2】)。続いて、「言葉がけ」の認知に関わる選手の自己概念の主要構成概念である身体的有能感について詳細に検討するために、中学生・高校生年代の選手のサッカーに特化した有能感を測定し得る尺度を作成し(第3章【研究3】)、その後、実際の指導現場における中学生年代のサッカー指導者の選手に対する「言葉がけ」が選手のサッカーに関する有能感の変容に及ぼす影響について検討している(第3章【研究4】)。その上で、中学生年代のサッカー指導者と選手を対象として、指導者が選手に対して実際に用いた「言葉がけ」の頻度と選手が指導者から受けていると認知している「言葉がけ」の頻度について検討するとともに、中学生年代の選手のサッカー有能感水準を評価した上で、異なる有能感水準ごとの指導者の「言葉がけ」に対する認知の差異について検討してい

る（第4章【研究5】）。

これらの結果から、中学生年代のサッカー指導者は、期待水準の異なる選手に対して異なる「言葉がけ」を行っており、失敗時における指導者からの否定的な評価は、指導者との関係性や自己概念に左右されず、選手に認知される可能性があることなどの結論を得ている（第5章）。以上のような一連の研究は、関連する先行研究での方法に基づき、成果に向けて順を追った手順によって構成されており、科学的に妥当なものであると考えられる。

（3）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

内容を構成する【研究1】から【研究5】までの調査では、先行研究に対する十分なレビューを行い、本研究に対して効果的で有効なデータ収集方法、および分析方法によって適切に行われている。また、調査者対象者からのインフォームドコンセントを得て実施されており、収集、分析倫理の点から、適切に研究が実施されていると考えられる。

（4）研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、まず「言葉がけ」と身体的有能感に関わって、研究を通して方法に対する十分な考察も加えながら前提的な知見を導き出し（【研究2】【研究3】【研究4】）、その後、「言葉がけ」が選手のサッカー有能感に及ぼす影響について、「選手が指導者からネガティブな評価を受けている頻度が高いほど、選手が指導者から叱責を受けていると認知する水準も高くなる傾向があること」「サッカーに関する有能感水準の異なる3群間において、認知された「言葉がけ」の頻度に明らかな差異はないこと」「プレーとは無関係な声かけを指導者から受けた場合に、サッカー有能感の高い選手の方が低い選手よりも指導者からの受容感を強く認知していること」を明らかにしている。以上のように、丁寧な調査から得られた結果について、先行研究を踏まえた考察を行い最終的な結論を導いていることから、その過程は妥当なものであると考えられる。

また、本論文を構成する主な研究は、当該の研究分野において最も大きな国内学会を含む査読を有する学術雑誌論文としても認められており、学術的な水準に十分達していると判断できる。

（5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文が導いた知見は、経験的に対処することが多かった「言葉がけ」という行為のあり方を通じて、体育の学習指導やスポーツの指導場面で今後、活用することが期待されるものである。また、選手が認知する指導者からの「言葉がけ」を規定する要因としての自己概念の影響についても、課題として今後再検討することが必要であることなどを指摘しており、指導者と学習者の相互作用のより詳細な検討とその実践的活用に向けて、本研究がさらに発展することが期待される。

以上より、本論文は学位取得にふさわしい意義を有し、さらに今後の成果に期待することができることから、博士(教育学)として評価できると判断された。